令和４年度　実践研究事業実施報告

国立沖縄青少年交流の家

１　教育事業名　　「体験！どきどき防災キャンプ」

２　ね　ら　い　　被災した後の避難所生活において自分に何ができるのかを、災害に関する知識・技能を学び、被災後の生活の疑似体験をすることで防災に対する意識を高め、自ら考えて動ける子供達の育成を図る。また、より深化し、特色ある防災プログラムを開発することで、学校や地域に普及啓発し国土強靭化につなげていくことを目的の一つとして、琉球大学と連携協働しながら調査・研究を行う。

３　期　　日　　令和４年１１月２６日（土）～１１月２７日（日）　１泊２日

４　場　　所　　国立沖縄青少年交流の家

５　募集定員　　沖縄県在住の小学生（４年生以上）２０名程度

６　参加人数　　１８名

７　参加者内訳　　小学生１８名　男子８名、女子１０名（４年生１２名、５年生３名、６年生３名）

８　講　　師　　城間　吉貴氏（琉球大学教育学部講師）

９　実施プログラム

				9:00	10:00	11:30	12:00	13:00	13:10	15:00	17:00	18:00	19:00	20:30	22:00
11/26（土）				乗船	フェリーとかしき	移動	昼食（食堂）	オープニング	講話「災害の時の心構え」 ミニ避難訓練①	実習①「防災グッズつくってみよう！」ダンボールベッド簡易トイレ	ドボン料理（調理実習）	夕食（ドボン料理）	実習②「防災体験」ペットボトルランタン作りナイトウォーク	入浴	就寝

	6:00	7:40	8:45	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	14:30	15:30	16:40			
11/27（日）	起床・清掃	朝食（食堂）	清掃チェック	ダンボールベッド撤収	講義・実習「こんな時どうする？」簡易蛇口作り	渡嘉敷村備蓄倉庫見学	昼食（食堂） ミニ避難②	ふり返り	エンディング	移動	フェリーとかしき	泊港着　解散			

10　事業の様子

防災グッズワークショップ

防災グッズの使い方を考えよう

段ボールベッド作成

どぼん料理

ペットボトル蛇口作成

備蓄倉庫見学

ミニ避難訓練１回目

簡易トイレ

参加証授与

11　エピソード（参加者の声、アンケートより）

【参加者(児童)の声】

・どぼん料理と備蓄倉庫の見学がとても楽しくて、いい経験になった。
・ご飯を防災に関する作り方で作れたし、自分で作った防災グッズを使えた。
・実際に防災グッズを作ることで、作り方を覚えられたし、使い方も分かった。
・災害の時にどうしたらいいのかがわかった。
・この事業に参加して、災害がどれくらい怖いのか、災害が起きた時どうやって行動すればいいのかがわかった。
・どぼん料理は、簡単で洗い物がなくてよかった。
・防災リュックは、自分や家族の命、ほかの人の命も助けられるとわかった。

担当者所見

（１）　成果

・昨年度の反省を生かし、「災害前→災害発生（避難訓練）→災害後（避難所生活）」と、時間経過に沿ったプログラムを組んだり、昨年取り組めなかったこと（避難訓練、簡易トイレを実際に使う）を取り入れたりするなど、被災時により役立つプログラムを実施することができた。
・講話・ワークショップにおいて、防災リュックに入れるべき防災グッズとその使い方についてグループで考え、その内容を発表し共有することで、各自が各家庭で準備しておくべき防災リュックの中身について学ぶことができた。
・段ボールベッドを仲間と協働して作成することで助け合いの大切さを知ることができた。また、体育館にて段ボールベッドで集団宿泊をすることで集団の中での行動について考えることができた。
・鍋だけを使い、洗い物も出ず、簡単に作れる、被災時だけでなく普段の生活でも役立つ「どぼん料理」（白米、ハンバーグ、オムレツ）に挑戦し、美味しい食事を自分たちで食することができた。うまくいかないこともあったが、各グループで協力する姿がみられた。
・防災備蓄倉庫の見学や講話を通して、地域の防災に対する準備や備蓄に関する意識の高揚が見られた。
・事業を通して学んだことを家庭に持ち帰り，家族と共有しようとする意思が見られた。参加者だけでなく参加者から身近な人への波及効果も期待できる。

（２）課題

・大きな地震等の災害はなくても、台風時に停電したり、断水したりすることは自分たちの生活の中で身近なものであることを実感させる導入時の工夫を行う必要がある。また、その時にも役立つことを体験的に学ぶ機会が「防災キャンプ」であるという意識を高めたい。そして、どぼん料理のように本キャンプで学んだことを普段の生活でも生かしていくようにするための工夫（レシピの配布等）も必要である。
・避難所での生活が、ただただ大変なものとして捉えてしまわないように、楽しみながら体験をしてもらうことで、防災に対する敷居を低くすることを意識してプログラム内容を検討し、作成・実施したが、もう少し実際の被災後の避難所生活を実感できるような部分をとり入れた両者のバランスを考えた内容を工夫する必要があると感じた。